

「理念性の構成」

阿 部 未 来

生物としてであれ、社会的存在としてであれ、人間がその生存において対処している世界は高度に複雑なものである。当面の行動が限定されず、それゆえ行動に対応する主題的関心が設定され、この関心から諸事物が一定の系列に整序されぬ時、この複雑性は完全な混沌であるかに見える。しかし、カオスに直面する主体というのは一種の異常態にすぎない。認識の最下層に位置する自然的知覚すら、少くとも生物的存在としての人間の行動に対応する一定の構造を備えている。しかし、人間の環境を整序しているのは、このような自然発生的なものだけではなく、また道具のような物的なものだけでもない。人間は自ら創りあげる特殊な存在を用いてこの環境に対処する。文化に属するものとしてのこれらの存在の特徴は、相互主観的な同一性、一義性であり、これこそが現在の人間の複雑な生存形態を作りあげ、自然的な本能にかかわって人間を統一し、社会の形成を可能にしていると思われる。すなわち、それは認識、言語、制度、技術などといったものである。我々が以下に検討しようと思うのは、フッサールが総じて「理念性」と呼ぶこのような存在者に対する現象学的分析であり、その主観性内部における構成の問題である。その際の基本的問題点は、フッサールの次のような言葉に示されている。「しかし、いかにして心の内部で構成された形象が、心的に発生したものであるにもかかわらず、決して心的実在者ではない………理念的対象性という独特の相互主観的存在に達するのか。(1)」

〔註〕 (1) Husserliana VI S. 370 (Beilage III, “Vom Ursprung der Geometrie”)

なお以下に使用する主要著作を列举し、略称を括弧内に示しておく。

- E. Husserl, (1) Die Krisis der europäischen Wissenschaften und transzendente Phänomenologie, Husserliana VI (Krisis)
(2) Vom Ursprung der Geometrie, Husserliana VI (UG)
(3) Erfahrung und Urteil, 4. Auflage, 1972. (EU)
(4) Formale und transzendente Logik, 1929. (FTL)
- H. Rombach, Strukturontologie, 1971.

I

まず最初に、理念性に関しフッサールがなした一般的規定を項目別に整理しておきたいと思う。

a) フッサールによれば、存在者の原理的区分の一方式として「実在的」(real)と「理念的」(ideal)という区別が行なわれうる。両者の区別の標識は非常に明確であり、それは

「時間性」である。より操作的に言うならば、当該の存在者を一定の時間点へ位置づけうるか位置づけえないかが「実在性」と「理念性」の明確な区別を与え、後者の場合にそのような位置づけが不可能とされる。すなわち、実在の対象は「ある客観的時点への登場によって個別化される⁽¹⁾」のに対し、理念的对象は「実在の対象の如く客観的時点に個別化されず、いわば至る所にある⁽²⁾」であってどこにもない非実在者である。⁽²⁾

この「時間性」の相違を判定基準とする「実在性」―「理念性」の区分をもとに、更に下位の区分基準を加えることにより、我々は全存在者の非常に概括的な序列づけを想定してみることが出来る。以下にそれを一応の整理のために提示しておく。

1. まず最下層に来るのは、過去把持―原印象―未来志向という形での流れの統一のみをその形式として持つ体験流、意識流である。この体験流は一応流れの各位相に基く個別化原理を有するから、当然「理念性」の層に属するものではない。しかし、「実在性」―「理念性」の区分を尺子定規に適用して「実在性」の層に帰属させることもできない。むしろこの体験流はおよそ時間点の同定を可能にする客観的時間以前のものであり、「実在的」―「理念的」の区別以前のものとして両者の根底に存し、全てに対して構成的働きを行なう別次元である。

2. この最下層に位置づけられ、全てに対して構成的に動く根源的な体験流の上に客観的時間が構成される。その場合、根源的な体験流はこの客観的時間との対応関係において再び把え直され、そこに実在の主観における心理的意識流が構成される。

3. 以上の二段階の上に来るのが、外部の物的実在である。フッサールは、こうした物的実在に関しては、「時間」のみならず、「空間―時間」への位置づけを語り、従ってこの場合には時間点のみならず空間点への位置づけ可能性が下位の判定基準として付加されているといっている。

4. 以上のような実在性に対し、理念的对象の場合は「一定の時間位置」を持たないといわれる。しかし、それはおよそ理念的对象が時間性と無縁であるということではない。フッサールが言っているのは、理念的对象は「時間的に生成しつつ出現するが、＜全ゆる時間において＞同一⁽³⁾」ということである。従って、例えば判断命題は理念的对象だが、その発生、この世界への現実化において実在的―心理的主観的判断行為に依存する。更には判断行為も、その内部での理念的对象の所与も、全て流動的体験流に属する。いかなる存在者も構成的意識の志向的相関項として存在し、従って理念的对象もまた体験として「与えられる際の時間」を持ち、全てに対して構成的に動く根源的意識流に属する。理念的对象が流動的なものと無縁というのではなく、ただ「様々な作用の多様性の中で数的に同一な理念的、論理的存在に遭遇する⁽⁴⁾」のである。

さて詳細に考えるならば更に下位区分⁽⁵⁾が指摘されねばならないとしても、ここに示した一応の段階づけが明らかにするのは上位の存在者の下位の存在者への依存関係であり、この関係はフッサールにおいて「基づけ」(Fundierung)と呼ばれている。より上位の対象は、より下位の対象を前提としそれに主観性^{もと}の構成能作が付加されることにより存在する。理念的对象性の場合、最上位に位置づけられるものとして、その構成において実に多岐にわたる形で他の下位成層(1. 2. 3.)に基

づいている。理念的対象の構成的分析の場合、その主要な主題となるのはこの「基づけ」関係の錯綜の解明および理念的対象を「基づける層」、基底的な層から構成する際に機能する主観性の能作の反省の明確化であり、ノエシスとノエマのそれぞれの方角に向かう多様な反省の作業を包括する。しかし、これらの点については後により詳細に述べるとして、ここでは上に展開した段階づけの図式の内に伏在する「基づけ」関係の確認にとどめることにしたい。

b) 次に、4で示したような理念的対象の独特な特性をより詳細に規定してゆくことにしたい。まずその根本的性格を端的に表現するなら「回帰的同一性」ということである。つまり「反復的過程の内でもくり返し把握されて再現される⁽⁶⁾」のであり、反復的過程は時間の様々な点に分散するが、対象はそれらを遍通して同一なのである。フッサールによれば、言語上の全ゆる単位、判断命題、幾何学的形象、数式、制度、旋律⁽⁷⁾など、それぞれ存在様式を異にしつつも全てこの性格を持ち、程度の差はあれ全て理念的存在である。

この回帰的同一性が時間の系列に関して強調される時、理念的対象の性格は「遍時間性」とか「全時間性」とか呼ばれる。確かにその反復的現実化において実在の主観の構成行為に基づき、更に決して回帰性を持たぬヘラクレイトスの体験流に帰属するとしても、それは別次元の構成体であり、「時間の多様性を貫いて流れる超時間的統一」である。しかし、「遍時間性」とか「全時間性」という表現が重要な意味を持つとしても、フッサールが回帰的同一性を強調しようするのは、単に時間系列の軸においてのみならず空間系列に関してでもあり、特に空間的に個別位置を占める多数の主観における分散的同一性、相互主観的同一性が重要である。「非実在的な対象は世界の内の空間一時間的出現を有する。……しかしそれは同一の主観によって様々な時間位置で反復的に産出される際に同一者として産出されるのと同じく、異なる諸主観によって産出される際にも同一者として産出される。⁽⁸⁾」(ただし、フッサールの指摘では、こうした理念的対象の遍通性は、「外延の一般性」ではなく、従って理念的対象は類的一般性と区別されねばならない。)

c) 以上のような相互主観的同一性は理念性を実在性から区別する重要な特性である。確かに実在性の中でも、物的実在に関して相互主観的所与性が云々されはする。しかし物的実在の場合はその地平性格により完全な相互主観的同一性は保証されず、その点で理念的対象は主体にとって「確定」(Feststellung)とか「所有」(Besitz)の対象となるという特権を有するとされる。では、フッサールが「確定」とか「所有」と呼ぶのはいかなる事態であるのか。

確定とか所有と呼ばれるのは、理念的対象の認識主観への独特な関係である。つまり、理念的対象の回帰的同一性は、受動的な連想的合致による同一性ではなく、主体の自発性における反復可能性、すなわち「将来にわたって自由に支配し、いかなる時でもくり返し取り出して他人に告げしらせることが出来る」という性格である。この支配可能性、自由利用の可能性が「確定」とか「所有」と呼ばれるのであり、従ってこういう意味で所有されている対象は「常にふたたび」(immer wieder)という性質を持つとされる。例えば、前述定的経験の層に対して判断の内に定着した「認識」が優先させられるのは、こうした理念的対象への定着において認識が「直

観がすぎ去った場合にも、持続的な所有物として維持されうる」からなのである。

しかし、このような「確定」、「所有」が可能なのは、理念的対象が主観の自発的行為と相関的に構成され、この自発的行為の生起、世界時間への参入が常に同一対象を回帰的反復的に生産するからである。従ってフッサールの強調するのは、理念的対象のノエマ的性格が全時間性であるとするれば、それを産出する作用のノエシス的基本性格が自発性、能動性であるという点である。この点においても理念性は実在性と明確に区別される。例えば、物的実在の構成の場合、「自我が現われの系列の内て現われてくるものへと受容的に把握するという仕方で行きなおるかどうかに全く関係なく、この現われの系列が受動的に結集して統一が行なわれる⁽⁹⁾」のみである。「論理学研究」以来の見解によれば、物体知覚の各局面の統一は「融合」による感性的統一であり、これも「構成」であるといわれるにしても、そこに現象的反省の際頭在的に観察される何らの自発的行為も存在せず、その意味でこの種の構成はフッサールによって「受動的構成」と呼ばれている。これに対し、判断命題、純粋本質、幾何学的形象その他の場合において、全て理念的対象の構成は自発的作用であり、能動的遂行であるとされている。理念的対象の回帰的同一性、確定および所有の可能性という性格は、能動性、自発性の性格と相関的にのみ存在しうるものであり、能動的な自我の行為のみが時間の流れを切り開いて理念的対象を現出させうるのである。

〔註〕

- (1) EU. S. 309
- (2) Ebd. S. 311
- (3) Ebd. S. 311
- (4) Sokolowski, R.: The Formation of Husserl's Concept of Constitution P. 168
- (5) 例えば、4の理念性の層においては更に、実在性へと「拘束された理念性」、および「自由な理念性」の区別が行なわれうる。Vgl. EU. S. 321
- (6) EU. S. 237 同様の性格づけに関しては、F. Saussure の Cours de linguistique générale P. 151, また type と token の区別を参照すること。
- (7) 言語単位については、UG. S. 368, 制度については EU. S. 320, 旋律については FTL. S. 18 を参照すること。
- (8) EU. S. 312
- (9) Ebd. S. 301

II

I では、理念的対象に関する一般的特徴づけを行なった。判断命題にしる、幾何学的対象にしる、基底となる様々な実在の成層を前提としつつ自発的作用によって構成され、その回帰的同一性により相互主観の一義性を有し、それゆえ認識者にとって所有可能な対象である。そこで次に、これらの理念的対象を産出する能動的作用に目を向け、理念的対象の構成の具体的過程を更に明ら

かにしてゆきたい。ここでは類例として判断命題と幾何学的対象の構成の場合を取り上げ、そこに存在する「基づけ」の諸運関および行為の「形式化」という点を重点的に取り出してみたい。

a) 1. まず「基づけ」の関係は、「確定的」認識の層と前述定的経験の層の間、また能動的層と受動的層の間に存在する。すでに前述定的な層において判断の基本構造が構成され、自発性の作用はそれを追遂することにより、あらかじめ前述定的層において構成されたものをひきうつし、それを確定するという機能を担っている。この基づけの関係を更に具体的に叙述すると次のようになる。

前述定的層における判断の基本構造の形成は、大体において分析と総合の図式において説明され、「把握」(Erfassung)、「解明」(Explikation)、「関係づけ」(Beziehen)⁽¹⁾などという非常に具体的な作用が判断生成の各段階に指定されている。つまり、対象を受容的に全面にわたって把える「把握」により主語の位置にくる基体が設定され、対象の内部地平へと視向する「解明」あるいは外部地平へと視向する「関係づけ」により、それぞれ基体の述語規定と外部対象への関係の定式化が行なわれるとされる。分析の側面がこれらのプリミティブな作用、すなわち受容性(Rezeptivität)に属する作用によって担われるのに対し、基体と規定の統一的把握は「移行の総合」(ないしは重合の総合)⁽²⁾という受動的総合によるとされ、しかも判断行為の各段階の統一も、また時間意識における受動的総合によるとされる。つまり、この前述定的層における判断の原初構造の構成では受動性が主要な側面を占めるのである。

判断構成において自発的作用の介入するのはこの受容的観察を前提してであり、それはこの観察において得られた成果の「確定」、「所有」をめざす特殊な関心から発するのである。「解明」基体が主語となり、解明項が述語となるという事態が生じうるのは、受容的活動性の内部で解明の過程を通じてあらかじめ構成されるが、ある仕方では隠れたままになっている統一に眼差しが向きなおることによってである。このような統一を把握しつつそれへと向き直ることは、変更された態度においてこの過程を繰り返し、受動的総合から能動的総合を打ちたてることを意味する⁽³⁾。従って、自発的、能動的な構成は前述定的層で形成された判断の基本構造を変更するわけではない。前述定的層における「把握」、「解明」、「移行の総合」という各項はこの順序において整序された一つのプロセスをなし、それぞれ基体、規定といった判断の構成要素を抽出し、受動的総合にゆだねるのであるが、能動的、自発的作用は受動的、非恣意的に経過するこの過程を自発的な反復、「くりかえしの通過」によって確定し、回帰的同一性という理念的な性格を保証しようとするのである。

2. 以上のような分析においてフッサールが判断発生過程の基本的モデルとして取上げているのは、他のより複雑な判断に対する「原細胞」となる「S ist P」の形の判断である。この形の判断の基本構造に対し、それを生成する過程として「把握」→「解明」→「移行の総合」などの系列が非常に明確な順序で対応し、基体S、規定Pなどの判断の構成要素を経験の全体領野から抽出する。この各行為の間の運関はそれぞれ「基づけ」の運関をなし、例えば「解明」は「全体的把握」に基づくとされている。従ってここから結論されることは、理念的対象を回帰同

一的に生み出す自発的生産行為は、それぞれ明確に規定された個々の処置が「内的に結びつく」ことによって形成されているということである。換言するならば、そもそも理念の対象の持つ回帰的同一性が保証されうるためには、対象のみならず対象を産出する反復的行為が明確な順序性において規定されていなければならない。判断の前述定的発生において見出される把握、解明、総合という過程もこの意味で単純な順序的構造において確定されているといえる。理念の対象とそれを構成する自発的行為は相互対応的であって、対象の側の回帰的同一性に対しては行為の側の回帰的同一性が対応している。しかるに、この行為の側が経験的主観の側の精神物理的現象として実在性に属し、空間時間的的定位を有するとすれば、回帰的同一性が保証されるには、それが空間的なものであれ時間的なものであれ一つの実在的構造を有し、それによって同定されるのでなければならない。人間の行為の場合、線状性の原理によって、それは明確に規定された個々の行為項の系列、連鎖をなすのでなければならない。「方式」という形態に整序されていなければならない。

b) 「基づけ」の諸連関、行為の方式化、形式化という事態は幾何学的形象の構成の場合にも指摘されうる。ここではまず後者から取り上げて見る。

1. 『危機』書においては、幾何学的形象の構成の基盤になるのは生活世界だとされている。この生活世界は、空間性、時間性、事物の相互作用性などをその基本的な「アプリオリ」⁽⁴⁾として有するが、これらの形式の規定力は非常に一般的であり、生活世界内の経験的主体（人間的主観性）の具体的意識に与えられるのは流動的な事物の変化、その「主観的・相対的」な所与性である。これに対して他方に存在するのが、「絶対的な同一性において規定し、絶対的に同一で、方法的——義的に規定されうる諸性質の基体として認識しうる」⁽⁵⁾理念的对象性としての幾何学的形象であり、この異質な両者を結びつけ、「主観的・相対的」な生活世界を産出する際の媒介を行なうのが、形式化された行為としての技術、物体形態の「完全化の技術」とか測定術と呼ばれるものである。そもそも行為が形式化されることにより、行為自体が相互主観的に一義化され、客観化されるが、幾何学的形象はこの形式化された行為に適合的、相互対応的に形成、産出されるのであり、従ってここにおいても存在するのは相互構成的な働きなのである。

2. この相互構成的過程は様々な仕方で、受動的にあらかじめ与えられる生活世界の基盤に依存する。例えば、理念化の作業は、形態の完全化、極限化という性格を有する以上、直線、平面、円などという特権的な形態の産出をめざす「方向づけ」なしには存在しえないが、この特権性、「方向づけ」を決定するのは「関心」であるとされている。すなわち生活世界に生きる人間の「特殊な実際の関心」⁽⁶⁾が理念化の作業の一つの前提として存在し、理念化の作業の「実践の地盤」としての生活世界への「基づけ」の関係が見出される。また形成を受ける対象の側では、「関心」の発動に先立ち、知覚圏としての生活世界に存する類型性、特に自然的物体の類型性が前提され、この類型の内から関心に応じて特権的な形態が選択されることにより、理念化の発動が可能となって、その極限に幾何学的形象が産出され、この過程と対応してまた主体の行為も規定される。この相互構成の過程は非常に複雑なものであるが、フッサールが生活世界に対して指定し

ている「実践の地盤」であるとか「知覚世界」、であるとかいう特殊規定に応じて「基づけ」の諸関連の錯綜を整理してみることができるであろう。

〔註〕

- (1) EU. S. 112～S. 116
- (2) Ebd. S. 127, S. 242
- (3) Ebd. S. 245
- (4) Krisis § 84を参照
- (5) Ebd. S. 24
- (6) Ebd. S. 22

III

前節で明らかとなった本質的な点は、理念的対象を産出する自発的行為が、形式化された「方式」という性格を持ち、回帰同一的な理念的対象の構成と同時に進行的にそれ自体回帰的に生起するということであり、またこの過程における能動的構成、自発的作用の側面が「受動的構成」、「受動的総合」の層に基づけられているということであった。いわば、受動的構成の諸層が理念的対象の構成過程全般をとりまくという形で、構成する自我の作用の活動空間を形成しているといえるのである。では、この受動的構成の層とはより具体的に言ってどのような層なのであるのか。

フッサールが「受動的構成」、「受動的総合」などと呼ぶものは、決して単一の層をなすのではなく、それ自身また「基づけ」の階梯を有する成層的な構造をなすのである。『経験と判断』で挙げられている主なもののみを列挙するならば、まず第一に登場するのは、「内的時間意識における総合」と呼ばれるものであり、これは主客両面にわたる一切を一つの流れの内に統一する。第二には「感覚場の統一を打ちたてる総合」であり、これによって感覚野における異質なものの対比現象、同質なものの融合が実現され、自我の関心を触発する原初的な対象構造が打ち立てられる。第三には、物体の現われの各局面を統一する受動的総合、および先述の「解明」における移行の総合などを包括する「重合の総合」(Deckungssynthesis)が指摘されることができ

る。では、これらの「受動的」と呼ばれる多様な構成的層に共通する特色とは何か。まず第一点は、明白な自我の関与が存在しないこと、あるいは関心の触発による自我傾向の展開を起点とする一連の自発的行為が反省において顕在化しないことである。従って第二に、受動的構成の場合、統一は非恣意的、自動的であり、「素材」に対する「形式」、「ヒューレ」に対する「志向的モルフュー」といった形式的契機の介在はなく、各要素は予め与えられている「領野」に関与することによって自動的にその内部に吸収される。いわば、「布置」(Konstellation)における統一なのである。こうした受動的といわれる統一形態に関してフッサールが「構成」とか「総合」という表現を用いたことから生ずる問題点、誤解などについては様々の論者が指摘している。従

って、むしろこのような統一形態は「場」的な統一性として記述することがより適切かと思われる。事実、フッサール自身も時間意識、感覚的領域などにおける原初的統合形態に対しては“Feld”(領野あるいは場)⁽¹⁾ という表現を非常に多用しているのである。

しかし、その点とはともかくとして、こうした受動的構成の段階は、「布置」による原初的統一を有し、従って主体がある程度持続的に関与しうる対象的構造を有するが、しかしそれは組織体であるとはいえ、自生的、自然的なものであり、決して理念的対象の如き相互主観的一義性、客観性を有することはない。その点に、フッサールが理念的対象の構成において特に自発的形成力を指摘する理由が存するのであるが、しかしこの形成はあくまでも受動的層において既に予め存在する統合、原初的構造の利用なくしてはありえず、その結果フッサールは、理念的対象の構成における様々な「基づけ」の諸関連を重視するのである。しかし、このような受動的層からの理念的対象の発生を追跡するにあたり、フッサールの如く相互主観性を前提せず、発生上の本質関連を個別的主観性の内部で確定しようとするのは、果たして十分であるのか。先に、理念的対象の構成の過程は、対象と主体の相互構成の過程であると指適されたが、この過程はまた主体間の相互形成の過程であるといえるのではないか。その意味で、フッサールがその遺稿『幾何学の起源』において、理念的対象の客観性の完全な構成が言語共同体、特に文字を有するそれを前提していると述べていることは興味深い⁽²⁾ 同質化された人間の共同体なしに理念的対象の反復的共有はあり得ず、逆に共同体における言語、制度等の様々な理念性の存在により、「人類の共同体形成(Vergemeinschaftung)が新しい段階に高められる⁽³⁾」と言えるのである。従って、こうした点から考えて、相互主観性の概念も単に一義的に取扱うばかりでなく、相互主観化の程度という観点の導入もまた必要であるといえるのではないかと思われる。

ともかく、以上のような過程はまた、主客両面にわたる固定化した組織体の形成の過程であるが、このような固定化した組織体とより基本的な自生的構造の間の関係をよく把握しているのが、ハインリッヒ・ロンバッハの「構造」(Struktur)と「体系」(System)の区別であると言えよう。ロンバッハは「構造体制」(Strukturverfassung)、「構造動態」(Strukturdynamik)、「構造発生」(Strukturgenese)の三段階を設定するが、構造発生の段階は、「<より高次>の段階ではなく、<より基底な>段階(die fundamentalere)である⁽⁴⁾」と言われる如く、構造発生を基底として構造体制や構造動態がその「派生形態」⁽⁵⁾(Abwandlungen)をなす、一種の基づけ関係が洞察されていると思われる。構造体制の段階に属する「体系」(System)とは、関係性に解消されない「自体性」を有する「要素」⁽⁶⁾(Element)という基体、担い手(Träger)の間に張り渡された関係の網(Netz)であり、全ゆるものの全ゆるものに対する関係性の徹底という構造発生の立場からすると、単純ではあるが、固定的、抽象的な特殊形態にすぎないのである。

このようなロンバッハの「構造存在論」のごく基本的な枠組みを援用するならば、完全な相互主観的一義性を有する理念的対象、またそれに対応する形式化された行為としての「方式」や「技術」は全て「体系」(System)のカテゴリーに属するものであり、結局全ゆる存在者が錯

綜する包括的領野、フッサールがそのつどの理論的関心に応じて生活世界、時間的体験流、前述定的経験などと呼んでいるものを前提し、非常に錯雑した「基づけ」の連関を介して形成されたものであるといえる。それは、いわばロンバッハが「体系」（システム）の代表例として取り上げている「機械」（Maschine）の如く、実在性を素材とし特殊な目的に応じて自発的行為により構成される存在であり、やはり「先行的な実体の上に設定された機能性⁽⁷⁾」である。反復再生が可能な行為的理念性としてフッサールが非実在的对象の一つの例としてあげる「制度」（例えば憲法など）の場合、社会の統一という機能に応じて組み上げられた観念体という性格上、特にこの点がよくあてはまり、また技術などの場合にも同然と言える。人間の場合、外的対象たる機械の使用のみならず、こうした内的機械性において高度に複雑な現実に対処していると言えるのではないか。人間とはある意味で徹頭徹尾、自己とその環境を作りあげるものと言えるのではあるまいか。

〔註〕

- (1) また“Stätte”（場所）などという表現も見受けられる。Vgl. EU. S. 74～S. 75
- (2) Husserliana VI S. 369～372
- (3) Ebd. S. 371
- (4) Strukturontologie S. 222.
- (5) Ebd.
- (6) Ebd. S. 25
- (7) Ebd. S. 30

〔哲学 研修員〕